怪盗キッドVS工藤新一　～本当の初戦～

ななじゅうご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
怪盗キッドＶＳ工藤新一　～本当の初戦～

【Ｎコード】
Ｎ１０５８Ｃ

【作者名】
ななじゅうご

【あらすじ】
【まじっく快斗】４巻に収録されている，【ブラック・スターの巻】を新一ｓｉｄｅでお届けします☆

ブラック・スターの巻　前編

「犯人は…あなたです！」

今日も無事に事件が解決した。いや，殺人事件に【無事】なんて言葉はねぇな…

俺は高校生探偵工藤新一……なーんて，こんな自己紹介しなくても，みんなオレの事知ってるよな？だから自己紹介は省略，っと。

「工藤君！今日もお手柄だったな～！本当にいつもいつもスマンな！」

「いえいえ，目暮警部。それほどでも…」

「いつも工藤君にはお世話になってるからなあー…何かお礼でもしたいところだが。」

「そんな！お礼だなんて…」

とは言ったものの，俺は目暮警部にしか頼めないような【やりたいこと】があるのだった。こんなチャンス，もうねぇかもしれないからな…頼んでみるか！

「あの～。実は僕，ちょっとやりたいことがあるんですけど…」

「おお！いいぞ，工藤君！何かね？何かおごってほしいとか？食べたいものでもあるのかね？」

目暮警部は目を輝かせる。これならＯＫもらえるかも……

「あ，いや…おごってほしいとかではなくて，実は…警視庁のヘリに乗せていただきたいのですが。」

なぜか一瞬の沈黙。あ，もしかして……ムリ？

「なんだね～？！工藤君！そんなことか！モチロン，いいに決まってるじゃろ！じゃあ…今度の土曜日なんてどうだ？早めのほうが良いだろう！」

俺の頼みは，相当以外だったらしい。でも，乗せてもらえるんだから文句はねぇな♪

そんな訳で，俺は土曜日にヘリに乗せてもらえることになった。

土曜日の朝，テレビのニュースで怪盗の話をしていたが，そのとき警部から電話がかかってきたのでよく見れなかった。

電話の内容は，今日の夜にヘリで事件の現場を見に行けるという事。どうやらさっきテレビでやっていた怪盗の予告場所らしい。こりゃー楽しみだなあ，今夜は★

その怪盗が予告した時間は夜の１２時だから，今日一日推理モノ読んで時間つぶすか！

う～ん，今日はなんてイイ一日なんだ～♪

夜１０時。
俺はタクシーで警視庁まで行き，目暮警部と会った。それからヘリのいろいろな説明を受け，怪盗の予告場所へ行くことになった。

１１時には駅前の古い時計台に到着。すでに警備用のヘリも5，6台飛んでいる。パトカーもずいぶんいるし…すんげー気合入ってんなあ～……
おっ，と。感心してる場合じゃねぇな。

俺は用意してきたパソコンを開き，事前に目暮警部に頼んで借りていた無線付きヘルメットを被った。この無線は時計台の中にいる2課の警察の人とつながっているのだ。
準備は出来たが，この時計台の構造がいまいち分からない…

２課の人に聞いてみっか！

「すみません！今日緊急に警視庁より応援に来た者ですが，この時計台の構造を私のパソコンに転送していただきたいのですが，よろしいですか？」

≪警視庁の応援？そんなもの要請した覚えはないですが…あなたは誰…なのですか？≫

「私は目暮警部の代理の者です！
　時間がないので，その怪盗を捕まえるためにも，早く時計台の構造を転送してください…
　パソコンのアドレスは――――――――」

アドレスを伝えた後，オレは疑問に思うことがあった。

なんだかずいぶん警戒されてる。

もしかして俺，信用されてない？確かに【工藤新一】とは言わなかったけど…そんなに怪しいやつに思われんのか，オレ…

そんな心配をしていたら，目暮警部がヘリの窓から外を見ながら言った。

「そりゃ警戒するに決まっとるだろ。その怪盗は神出鬼没，変装は大の得意で声色無数の持ち主なんだから，いったい誰に変装しているのか分からないんだよ……」

な，なるほど…もう誰かに変装してこの辺に潜んでるかもしれないってことだな。

でもこの警官がいっぱいいる中で誰かに変装するといったら，その泥棒はやっぱり警官に変装するだろうな…1人くらい増えてもバレ

ないだろうし。

「あの！刑事さん。１つ助言があるのですが。よろしいですか？」
≪はい……なんでしょう？≫
さっき無線に出た人とは別の人だった。
「その泥棒が他人になりすます変装の名人なら，普通，人が覚えていないことまで記憶している可能性が高いです！なので刑事さんを通すときに，氏名，年齢，誕生日の後で免許証番号を聞いてみてください。もしその人がその泥棒なら正確な免許証番号を答えるはずですから…」
≪おお！な，なるほど…よし，分かりました！各塔の指揮官に伝えておきます！≫
「お願いしますね。」

その時，ようやくパソコンに時計台の構造の資料が送られてきた。
軽く目を通してみたけど，なんだか通風口が多い。そこを使って逃げる可能性もあるだろうな…

１１時４２分。
今度は突然，無線に連絡が入った。
≪館内でか…ッドを発見！警察官に扮しています！現在Ｃ班とＤ班が追跡中です！警部にも連絡しました！≫
えーっと。
発見したというのは聞こえたけど，肝心なその泥棒の名前がノイズのせいで聞こえなかった。まあいいか。後で聞けば…
「分かりました！それでは，ただちに時計台の出入り口を封鎖してください。」

≪あー…スミマセン，もう一度お願いします！ノイズがひどくてよく聞こえませんでした…！≫
あらら。やっぱりノイズがひどいのね…風強いからな…
「もう一度言います！直ちに時計台の出入り口を封鎖してください！
　こちらの指示があるまで絶対に開けないように…これで彼は穴の中で両手をもがれたモグラ当然だ…」

予告時間まであと１８分。
やっぱりその泥棒は警察に変装して館内に入ろうとしていたんだな…あとは警察が捕まえてくれればいいけど…

すると再び無線に連絡が。
≪Ｄ班中村と川田！三階のトイレ近辺で目標を見失いました！≫
あっちゃ～…やっぱり見失っちゃったか。でも，まだそんなに時間は経っていない…絶対近くにいるはずだ…！
俺は時計台の構造の三階トイレ付近を見ると，通風口があるのに気が付いた。
「落ち着いて…彼はまだあなた方のそばにいるはずです。そのトイレの奥に設置されている通風口，ネジが外れていませんか？」
≪ネジ…？
　は，外れてる！？≫
「だったら彼はその中です！追跡を続行してください！」
やっぱりな。このまま追跡を続行すれば，いずれその泥棒を発見することができ，ヤツの歯車が狂い始める。そこを追い込めば……
……！

≪いたぞ，奴だ！！≫
よし，泥棒は発見できたな…

ＲＲＲＲＲ…
次は目暮警部の携帯が鳴りだした。
「あー。目暮だが…」
≪目暮ぇ～！！！やっぱりお前かー！どーいうつもりだ，ガキ連れてこんな所に！≫
いきなり罵声が聞こえる。電話の外からでも声が聞こえるんだから，ずいぶん怒鳴ってるな…
≪この現場の指揮官はこのワシだぞ！？それにお前は課が違うだろうーが！≫
「スマンスマン，一度このヘリに乗せる約束を彼としててな，どーせならと思って現場に連れて来たんだが…」
そこまで目暮警部が言ってから，俺は警部の携帯電話を少し無理矢理に奪った。

「警部さん！失礼ですがあなたと議論している時間はありません…その泥棒を捕まえたければ僕の指示に従ってください…」
うわー……警部にこんな口の聞きかたしてもいいのかぁ～…
内心少しだけ不安になったが，そこはもう強気でいくか。
「彼は今，犯行前に正体を暴かれ動揺を来たし，彼の計画の歯車はくるい始めている…確保するには絶好のチャンス！」
そう言ってヘルメットを脱ぐ。
≪だ，誰だ…何なんだお前は！？≫

「工藤新一…探偵ですよ。」

ブラック・スターの巻　後編

「工藤新一…探偵ですよ…」

ちょっとかっこつけすぎた？またこの警部さんに怒られるかもな…はははは…

≪工藤…新一だとお？！

――――あ，知ってます知ってます！謎めいた殺人事件を，次々に解決している高校生探偵…≫

あ。後に聞こえてきた声の人，さっき俺に時計台の構造を送ってくれた人だ。

≪じゃあお前も課が違うじゃないか！！！！！ワシらが相手にしているのは怪盗だぞ！？≫

…すんげぇ怒られたぞ，おい…

声，大きいっつーの…

≪とにかく！これは警察の仕事だ！部外者の君はそのヘリの中で大人しくしてろ！！≫

大人しくしてろと言われても。

やっぱり怪盗と言ったら探偵…だろ？

≪こちら中村！目標，通風口から出ようとしている模様！ど，どうしますか！？≫
「焦らないで…もはや獲物はあなたのツメにかかったも同然！あなたの現在位置を教えて下さい！」
そう言って，パソコンの通風口の場所を再び見る。
≪そ，それが…暗い中で動き回ったので正確な位置は……3階から1つ上がってここが4階だということは分かるんですが…≫
「大丈夫！館内に28ある通風口の出口はすでに全て固めてあります！そのまま追跡を…」
もう彼に逃げ場はない……
「4階の通風口を固めている警官隊は確保する用意を…」
俺は警官に指示をだしてしまったことを少しだけ後悔した。またあの警部さん，怒ってそうだな。

息つく暇もなく，すぐに無線が入った。
≪こ，こちら中村！通風口出口で目標を見失いました！≫
なっ…何！？4階の通風口の出口は全部固めてあるはずなんだけど…
≪現在位置は？≫
俺が聞くのより早く，さっきの警部さんが聞きたかったことをさきに聞いてしまった。

≪えーっとここは…４階の東側の廊下です！現在目標は警官の変装をとき階段を下って逃走中！至急応援を…≫

焦って警官の変装を解いた，だと…？

「妙ですね……」

「え？」

思わず，考えていたことを口に出した。目暮警部は俺が突然話し出したので一瞬ビックリしたようだった。

「警官が密集するあの空間で警官の変装を解くのは，ヤドカリが殻を捨て，海中をうろついているようなもの…ボクには理解できない…」

「そうか……もしかして，宝石を諦めたとか…？」

警部が意見を述べる。

「いや，それはないと思いますよ，警部…たぶんその泥棒は当初の計画を変更しただけだと思います。きっと何か考えがあるんでしょう……」

そして俺は時計を見た。おっと，もう１１時５９分…

「あと１分だ…」

リンゴ〜ン，リンゴ〜ン…

１２時ジャスト。
時計台の鐘がなると同時に，時計台の下の工事現場の台から白い煙が上がった。

しばらく経った後，時計を見ると……

ない。
時計の針が……ない。

一瞬にしてどよめきがあがった。目暮警部も驚いている様子。

しかし俺は冷静に考えた。
ありえない…時計の針が一瞬にして消えるなんて……

そう思って，よく目をこらして時計台を見ていると，気がつくことがあった。
文字盤が，揺れてる？

「すみません！ヘリをもう少し時計台に近づけて…」
近づけば分かるはずだ。すべての謎が。そして，その泥棒の正体が！

思っていた通り，ヘリが時計台に近づくと文字盤が激しく揺れ始めた。
「どういうことだね，工藤君？」
「煙幕と共に文字盤を照らすライトを切り，前もって仕掛けていた巨大スクリーンで文字盤を覆い，そこに時計の針が消える映像を工事中の足場に取り付けておいた映写機から投影したんですよ…」
そう言ってから，目暮警部のポケットから拳銃を取る。警部，気づいてねーぞ…いいのかよ……

「しかしそんなトリック，すぐにバレるんじゃ…」
「そのトリックはフェイク…おそらく彼は今スクリーンの裏で短針に付いている宝石を…」
そこまで真相を話してから，拳銃の弾を確認し，勢いよくヘリのドアを開けた。

「ちょっとお借りしますよ…」
「え？……あ！」
目暮警部が俺を止めるのより先に，スクリーンが止めてあるパイプめがけて1発，銃を撃った。
「お，おい工藤君！？」
「大丈夫！人には絶対当てませんから…」
「いや，そういう問題じゃなくて…」
このとき，この目暮警部の言葉には何も思わなかったけど，あとで考えると…
実は，ものすごく後悔…

それについてはまた後で。

「さあマジックショーのフィナーレだ…座長の姿を拝見するとしましょうか…」
ドンッ！
と，鈍い音がして，みごとにスクリーンの下部分だけがはがれる！

と考えていたのだが。
その泥棒はどうやらずいぶん頭の切れる人だったらしく，俺が撃ったのと同時に泥棒は上の部分に2発銃を撃ち，スクリーンをはがしてスクリーンと共に人ごみの中に逃げたのだった…
あの中から探すのは無理だな…

≪おい目暮ぇ！！！きさまかァ発砲したのは！？≫
何度目かは忘れたけれど，また例の警部さんの怒鳴り声が目暮警部の携帯電話から聞こえてきた。すかさず俺が携帯を奪い，
「ところで警部さん，彼は何か言っていませんでしたか？」
と言って話題を変えた。
≪あ、ああ言ってたよ。暗号がどうのこうのって…≫
「暗号？」

その暗号とは，時計の数字と同じように文字が書いてあり，時計回りに読むと，【コナケノネナハワテサニオ】……
なんっか，読めそうで読めないな…

時計台…
時計回りに……

なるほどな…

「まあよかったじゃないか，時計台は無事で彼の犯行は失敗に終わったんだから…」
いや…そいつは違うぜ目暮警部…
彼は文字盤に暗号を残して時計台を警察に委ね，移築を予定していたオーナーの手からまんまと奪いやがったんだ…
それに，暗号にちゃんと書いてあるだろ？
カタカナをローマ字に直して母音を一文字ずつ時計回りにズラして読むと…
【コノカネノネハワタセナイ
この鐘の音は渡せない】ってな……

「そーいえばまだ聞いてませんでしたよね，その泥棒の名前……目暮警部？」
あっちゃあ～…
警部ってば，必死に暗号といてるよ。
ま，いっか。

あれほどのずるがしこい泥棒だったら，またいつか…会うことがあ

るだろうしな……

ブラック・スターの巻　後編（後書き）

いきなり投稿して完結しました…；

この小説はかなり前から少しずつ書いていて，ようやく出来ました。マンガにない部分は私の妄想でかいたんですけど…どうだったでしょうか？

ていうかこの小説，怪盗キッドについての話なのに，【怪盗キッド】という言葉が一度も出てきていないんですよ！なんかすごいですねぇ…（笑）

それでは，コメントお待ちしております！

ＰＳ　【あいつの頼み】，最近更新していなくてスミマセン！ただ今頑張って書いてます！！もうすこしお待ちください…☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1058c/

怪盗キッドVS工藤新一　～本当の初戦～

2010年10月15日20時45分発行